

攬勝亭現地見学会

令和2年4月19日

1 主催 NOP 法人もりの案内人の会 会津支部と会津若松市教育委員会

2 見学会の開催経過

これまで、この庭園は所有者の方の意向により、長い間見学や調査などは出来ませんでした。今回、所有者のご理解を得て、現況調査と見学会を開催することが出来ることになりました。

見学会では、NOP 法人もりの案内人の会 会津支部と会津若松市教育委員会が合同で開催し、もりの案内人の会が樹木や植物、教育委員会で池庭について解説いたします。

3 攬勝亭の来歴

・『若松市史』昭和16年

亭は北会津郡神指村字柳原元肝煎長尾代吉の庭園なり、この亭最も眺望に富めるを以て、四季折々文人墨客避塵の楽園となし、藩主遊獵の途次休息せられと云うを以て世に知られる。

・長尾修著『会津史談』第92号「第四部 「攬勝亭内碑文」とその周辺」別家長尾家に伝わる攬勝亭についての伝承より

長尾本家元屋敷地に今も残る攬勝亭は、小堀遠州系の名園で、御薬園を造園した近江の目黒浄定の作と伝わる。柳原の肝煎長尾代吉の庭園であった。天文12年長尾信景がここに住んで庭園を築き(攬勝亭の前身の庭)、天然と人工の佳景を楽しんだという。保科正之公が庭号を攬勝亭と命名したと伝わる。当時の文人や墨客がしばしば清遊の場として来園している。攬勝亭内には、松平容保公の小碑も現存する。

4 概要

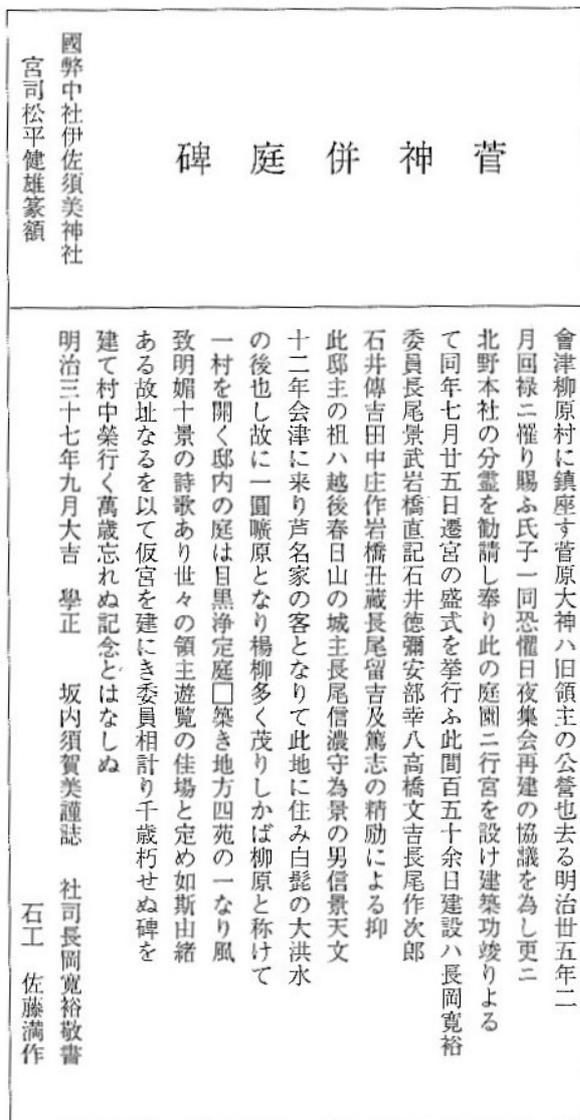
庭園は、敷地の東側にあり面積は約830坪です。その中に5カ所ほどの築山と上池、中池、下池の3つのやや大きな池が細い水路によって結ばれています。

池や水路の岸は石が組まれた石組護岸となっており、その石材も上流側にはやや大形の石が使われ、中池の先の目立つところには赤石が使われるなど見た目にも工夫がされています。

池の岬などには燈籠が建てられ廻遊する人を誘い、上島には石橋や沢飛があり、水に近くで親しむような作りになっています。中池は胴木や石を用いて一段深くしています。

庭園の南西端付近が視点場となり往時には主屋等が建てられていたと思われ、対岸の社からは庭園とその奥にあった屋敷を望む視点場となっていたと考えられます。

- ※・松平健雄=松平容保の次男
- ・天文十二年=1543年
- ・白髭の大洪水=天文5年(1536年)6月28日あったとされる会津地方の大洪水



会津史談会発行『会津史談』第92号「第四部 「攬勝亭内碑文」とその周辺」長尾修から転載

攬勝亭庭園について

有力な商家の庭で、既に主屋は失われ、南西に離れが残っている。

西側に屋敷の門と両側に板塀があり、門を潜ると左側に花崗岩製四方仏の手水鉢、右側に句碑(享保の銘)と立石が門の両側を飾っている。

敷地外周の北・東・南側には針葉樹を中心とした高さ20m程度の屋敷林があり、まわる平庭で、南東に築山を割るように狭隘な溪谷風の流れから導水され、滝口的な瀬越口より給水されている。石橋と沢飛で結ばれた中島を持つ上池を経て、再度、築山の張り出した岬の外側を通り流れ、滝添え石のある瀬越を経て流れは最大の中池に水が注がれる。

中池は、中央を胴木によって池底が更に深く水深を確保したように見え、中心に魚だまり的な掘り込みも存在する。この中池から再度細い流れは北に向かい、コンクリートの橋を経て小さな下池に至る。

岬や池のほとりなどの要所に凝灰岩製の雪見石燈籠や層塔が据えられ添景となっている。護岸の石組みは地元の石材が用いられ、上流が大振りで下流に従い小さなものとなっており、自然の流れを想起させる。

岬の突端に大きな景石を据え、また庭園の要所には地域の赤石を用い、変化を持たせアクセントとしている。

庭園の東側には、築山とその前にお社があり、20mを越の杉の巨木があり、御神木的な雰囲気を持ち添景となっている。そこから庭園を見返し、庭園とその奥の屋敷を愛でる視点場であったと思われる。

庭園内の樹木は、アカマツ、モミジ類、桜などで構成され、自然的な雰囲気を醸し出している。

主要な視点場である主屋は失われるものの、西側の広場に東と南を意識して庭園が展開し、北東側には遠く磐梯山を望み庭園の景色に取り込んだと考えられる。

庭園は、変化に飛んだ築山によって見え隠れを作り、瀬越や早瀬、ゆるやかに蛇行する流れ、池の整水面など水の表情を楽しむ事を意識した、自然感豊かな庭園として評価できる。

しかし、現在の庭はやや荒れた状態となっているが造営時は建築物と庭園が同時期につくられ、会津の商家の庭園として総合的な空間が作ら上げられていたものと考えられる。現在でもその庭園の良さの一部を感じる事が出来る。

その後、建築物が失われたことにより座敷からの視点場が失われ、さらに所有者が変わるなどから総合的空間という視点ではなく改変されたり、石造物が追加されたりして、徐々に荒廃していったものと考えられる。

京都芸術大学

非常勤講師 吉村龍二